

『G8 首脳に対する宗教者からの提言』

G8 宗教指導者サミット

2008 年 6 月 大阪・京都

この文書は、10 年前から始まった G8 主要国首脳会議*1 の政治的指導者に対する宗教指導者からの今回が第 3 回目*2 となるコミュニケ(声明)である。

*1 従来の G7 にロシアが加わって現 G8 体制になってから数えて。

*2 「G8 宗教指導者サミット」は、2007 年のサンクトペテルブルグサミットの際に始まった。

序文 『地球と生きる：世界の諸宗教からのメッセージ』

世界のさまざまな宗教の指導者であるわれわれは、G8 首脳会議を前に、大阪と京都に集った。環境的危機と災害、経済的・社会的機能不全や政治的・道徳的危機に対して、われわれの共有する懸念と使命について宣言する。

これらの問題は、われわれの地球を破壊し、人類の共存する社会を分裂させるものである。産業的発展の結果によってより複雑化したこれらの諸問題が、築何百年という歴史を有する神社仏閣において熟考された。われわれはまた、ソーシャルワーカーやボランティアの人たちがケア支援している段ボールのシートや簡易寝具に寝そべっている何百人もの失業者やホームレスの人々のシェルター(避難施設)を訪問した。

われわれは、世界を取り巻く繁栄と貧困という両方の問題を抱えている。われわれがより持続可能なライフスタイルに自分たちを適合させ、より平等になるために富を分かち合い、天災・人災の被災者に対する同情の気持ちを行動に移し、世界の各所で見られる不正義を正すためにより深く関わって行くことに、われわれは努力を傾ける。

われわれの使命

地球環境が危機的状況を迎えているということが、世界的な共通認識となったこの時期に、今年度の G8 首脳会議が日本で開催されるということ自体、非常に象徴的である。なぜなら、仏教的・汎神論的・先祖崇拝的、すなわち、非一神教的な伝統を有する東洋の社会には、破壊と喪失という現代史にもかかわらず、環境を守ることに動員された実践的な道具が残されているからである。もちろん、これは昨今のアジアにおける工業化を妨げるものではない。

A Proposal from People of Religion to the leaders of the G8 nations, 2008

しかし、世界中の全ての宗教的伝統に共通するものは、正義と、両性間の平等を含む人権の保護が全てに優先されるという信仰である。共存共栄を実現させるためには、戦争を避けるための可能なかぎりのあらゆる措置がとられるべきある。

1 自然と生きる

地球環境の危機は、もはや人類の生存を脅かすまでに切迫し、人類はどのようにすればこの地球で生き残れるかを真剣に模索しなければならない時期に至っている。生物多様性は恐竜が絶滅した時代の 1000 倍のスピードで今や急速に失われている。G8 各国の科学アカデミー(学術会議)から提出された気候変動に関する緊急提言*3 は、「環境危機への対策を人類ひとりひとりの責任において、地球的、国家的、地域的、あらゆるレベルで行動を伴うものに変える必要がある。各地域の関係者は、影響評価と解決策の特定を行わなければならない」と指摘している。

よって、われわれは、省資源に取り組み、低炭素社会へ移行するために尽力する。つい先頃神戸で開催された G8 環境大臣会合で宣言された変革は、すべての国において、そのライフスタイル、生産・消費のパターン、社会的インフラを整える上で必要となるであろう。この意識と行動の変革は、全力を傾注して開発されなければならない「環境に優しい新技術」を補強するものになるであろう。物質主義と消費主義に毒されているということ認識し、自然破壊をとまなう欲望が暴走することを抑制するように、われわれ宗教者は信者を指導し、他者の幸福と繁栄を祈る利他の「こころ」、他者を愛し慈しむ慈悲の「こころ」を人類が取り戻さない限り、この危機的状況の解決は不可能である。

*3 G8+5 学術会議共同宣言『気候変動：適応策と低炭素社会への転換』2008

2 民族的・宗教的多様性：ひとつの使命

神が創造した宇宙は、多様性という究極的な美に飾られている。その多様性は、民族文化や宗教という形で、もっとも鮮やかに表現されている。したがって、その崇高なる多様性を否定する権利は、いかなる宗教的権威および世俗的権威にも与えられていない。にもかかわらず、人類社会には今も昔も強者が弱者を抑圧し、その多様性を抹殺しようとする動きがある。幸いにも、われわれの近代的な感性は、これらのことを「非人道的」と認識し、今年 60 周年を祝う『国連人権宣言』にも反していると認識している。しかし、今日、われわれは各大陸において、宗教的多様性への賞賛への原則を完

全に阻害する社会的・政治的抑圧の状況の実例を数多く目撃している。例えば、チベットやミャンマーで起こっていることである。

男女間の平等と貧富の格差の縮小という問題も横たわっている。しかし、それらの問題に対して、宗教者は、他者を責めるという形ではなく、ほかならぬ「自分自身の罪」であるという主体的な痛みを感じることから始めなくてはならない。そこから、われわれがどのような行動をとらなくてはならないか明らかになる。地球共同体で起きている悲劇から目を背けることは、人間として無責任であり、究極的には神を冒瀆することである。われわれがすべきことは明白である。楽観主義とあらゆる絶望に対抗する精神において、宗教者はその解決の場へ自ら身を置き、すべての傷ついた人々に対する慈悲心でもって祈り、そして行動することに関与するのである。これらの複雑に絡み合った問題を解決するために、われわれは対等なパートナーであると考えている。

3 アフリカ：貧困の精算

アフリカでは、新植民地主義という病んだ状況が続く中、様々な形態の貧困が生まれ出され、それにより、さらにより複雑な環境問題や政治問題が引き起こされている。アフリカの将来は、このような破壊への道を辿ることもできるし、その資源を有効に利用することもできる。つまり、21世紀における人類の未来を揺り動かす「実験的な」大陸としての鍵を有していることを意味する。

アフリカの貧困は、2005年以来 G8 首脳会議の議題となってきた。最近、日本の福田首相は「アフリカにおいて、教育なしには経済的発展はない」という提言を受け取った。日本学術会議は、「低炭素社会への移行のためにライフスタイルを変えるという高等教育の重要性に関する提言書」を今回の G8 首脳会議に提出した。それゆえ、われわれ宗教指導者は、アフリカと G8 諸国間における広範囲にわたる深い学生交流を行うためのスカラーシップ基金を設立することを提言する。その目的の実現に貢献するために、この度の G8 首脳会議がこののについてディスカッションすることを求める。

この特別な提言は、地球共同体の発展において、教育の必要性が極めて重要であることを反映している。それは、2007年の G8 宗教指導者サミットの提言文である『Just Participation: A Call from Cologne(参加せよ：ケルンからの呼びかけ)』とも、また、地球的なレベルでの宗教指導者と政治指導者のとの間の話し合いの元となっている『ミレニアム開発目標』が強調する理念とも、物質と精神の両面に完全に合致している。

結論

この提言書は、上述した 1,2,3 の三つの分野において、具体的進捗があったかということモニターするため、一年間という期限を設けている。また、われわれ宗教指導者

は、各国政府がわれわれの提言に対して、どれだけ真摯に取り組んだかということから精査し、次年度の G8 宗教指導者サミットが開催されるまでに「バランスシート(達成状況評価表)」作成して、その進捗度合いを信者に伝え、教導していく。

今日よく見られることであるが、人々(政府や企業)は「短期間評価主義」に囚われ、短期間の成果に力点を置く傾向がある。われわれの子孫の将来を救わなければならないという長期間にわたる責任については、まだ世界中のどの国においても考案されていない。これは、すべての公的機関や、問題意識を有する市民が注意を払わなければならない緊急の課題である。そして、今回のこの会議までのわずか一年の間に、われわれは、地球的な危機に直面して、この病んだ世界のために何をしてきたか、その取り組みの達成度合いについて厳しい査定・評価をしなければならない。

すべての宗教は、「いのち」というものを神聖かつ相互に関連したものであると考えている。生きとし生けるものの中で最も高い知恵を有している人類は、弱くて、傷つき易くて、まさに絶滅の危機に瀕している生物ことを顧み、これらに手をさしのべる責任を有している。したがって、われわれはあなたがたに、政府の政策が「地球上の生きとし生けるものに対してフェアであるかどうか」と問いかけ、監視することを切望する。

(正文は英語)